

一 京都哲学会公開講演会記事

恒例の京都哲学会公開講演会は、平成九年十一月八日午後一時半から、京都大学文学部新館第三講義室において左記のごとく行われた。

一、ルーベンスと専門画家たち

—— 絵画ジャンルの多様性をめぐって ——

京都大学助教授 中村俊春氏

一、神の像 (Imago Dei) と人間

—— キリスト教人間観における一つの問題点 ——

京都大学教授 水垣 渉氏

講演会は数多くの会員の方々の出席を得て盛会であった。また講演会終了後、京大会館において懇親会をもち、多数の会員が講演者とともに討論と欲談の一時を過ごした。

二 外国人学者来訪講演会記事

平成九年九月より平成十年一月末までに、京都大学大学院文学研究科の旧哲学科系諸研究室の主催ないし共催のもとに行われた、外国人学者による講演会は、次の通りである。

グレン・エルダー氏 (アメリカ・ノースカロライナ大学チャペルヒル校教授)

「発達理論としてのライフコース」

平成九年九月六日 於京都大学文学部

ブルース・パウチャー氏 (イギリス・ロンドンユニヴァーシ

ティカレッジ助教)

「絵画と彫刻の間——ヤコポ・サンリビノーとバラゴーネ」

平成九年十月二十四日 於京都大学文学部

E・シュタインケルナー氏 (オーストリア・ウィーン大学教

授)

「タボ寺に於ける写本断片・テキスト・碑文」

平成九年十一月一日 於京都大学文学部

ドナルド・レヴン氏 (アメリカ・シカゴ大学教授)

「G・ジンメルと現代の社会学論」

平成九年十二月十二日 於京都大学文学部

マーク・ハウザー氏 (アメリカ・ハーヴァード大学準教授)

「霊長類のコミュニケーションの進化——神経生理学のおよび進化的特徴」

平成十年一月十九日 於京都大学文学部

三 京都大学文学部 (哲学系) 卒業論文題目

——平成九年三月

哲学

浅 沼 渉 フッサール『イデーン』における認識の基礎

づけについて

市 こうた 『物質と記憶』におけるベルクソンの心身関係論について

係論について

相良 義勝 現存在と世界——ハイデガー『存在と時間』における世界内存在の分析——

西松 豊起 ハイデガー『存在と時間』における「存在可能」の問題

三谷 尚澄 カント『純粹理性批判』における「自由」の概念について

久木田 水生 『プリンキピア・マテマティカ』のタイプ理論

島田 啓二 『ベルクソン』意識に直接与えられているものについての試論』における自由

大草 輝政 ソクラテスにおけるエレンコス（吟味論駁）の位置づけ

小川 貴史 ヘーゲルにおける哲学史と哲学との関係

長田 洋一 キェルケゴールにおける主体的真理の問題——逆説と理性——

中條 航 プラトン『メノン』の実験——Parisは何を経験するのか——

藤岡 明 理性的立場の倫理学——カント『実践理性批判』——

山田 圭一 カントにおけるカテゴリーの演繹の構造

笹原 博史 カント『実践理性批判』における要請の問題について

倫理学

奥田 太郎 ヒューム『人間本性論』における正義と所有について

児玉 聡 ベンタムにおける法と道徳の区別について

篠原 小百合 シンウィックにおける直観主義的方法と功利主義

多賀 健太郎 弁証法の〈窓〉——ハーバマスの批判以後の「啓蒙の弁証法」——

深谷 太清 ドイツ観念論における自己意識と承認

賀来 佳子 松本竣介について

釧持 あずさ フラ・アンジェリコ作コルトーナの「受胎告知」について

高柳 陶子 J・S・バツハ『平均律クラヴィーア曲集第一巻』について

徳重 久美 出口王仁三郎の作陶について

夏目 多代 八木一夫について

深谷 訓子 ティツィアーノ作「ペーザロの聖母」について

柳 有紀 ジェニー・ホルツァーにおける発表形態

西洋哲学史

美学美術史学

山崎 優 ヘンリー・ムーア「グレンキルンの十字架」について

吉倉 宏樹 東山魁夷について

伊藤 敏明 現代社会と音楽——新しい受容のあり方について——

竹内 亜紀子 神護寺本尊の造像者

田村 広済 クリストの梱包芸術

牧野 雅光 映画監督増村保造の思想と方法論について

松永 幹廣 デザインの力

若木 民喜 『サージエント・ペーズ・ロンリー・ハート・クラブ・バンド』小論

林田 照男 薬師寺本尊について

下村 理早 安田靉彦についての考察

宗 教 学

小林 道太郎 ニーチェの「生」の思想

伊藤 藤 章 近現代における「史的イエス像」の変遷についての考察

伊東 淳 R・シュタイナーの世界観

白神 秀敏 カルト及びマインドコントロール

仏 教 学

堀田 晃司 ブッダの哲学の研究——スッタニパータ・アッタカヴァツガの最初部を理解することによ

つて——

心 理 学

今西 みふゆ 快・不快の印象が記憶の検索過程に与える影響

梅澤 慶子 個人の労働観と就業形態の関係

大洞 宗史 眼球運動からみた日本語の読み

尾関 宏文 群化における視覚情報の統合過程の検討

金 児 恵 選挙運動グループの発達とメンバーの行動帰属様式

上屋敷 延 誉 人間の見栄が確信度に与える影響

川崎 やよい 母国語が子音の認知に及ぼす影響

小杉 大輔 社会的ルールからみた大学生の友人関係

原 かおり 問題解決過程に及ぼす筆記と発話の影響

牛尾 裕 城 非特徴的な選択肢に対する意志決定の分析

境 野 寛 方向感覚の自己評定と認知地図形成過程の関係

田中 修司 服装における流行受容の個人差

社 会 学

坂本 綾 明治大正期における日本女性の主体性形成

西嶋 健二郎 高齢化社会における老人問題

山本 涉 広告の社会学

池田 智恵 怪奇映画の文化社会学

石原 俊 沖繩・「祖国」復帰」と基地労働者

伊東 晶子 いじめ・創られた言説

上田 宏明 日本の戦後民主主義——J・ハーバーマス

「公共性」の視点から——

大熊 正浩 アダルト・チルドレンの社会学的考察

大倉 孝則 現代日本における競馬の社会学的考察

大橋 盛子 日本の社会階層に関する考察

岡田 直子 情報化社会における都市の変容

勝部 滋 マレーシアにおける人種・民族関係の比較社会学的考察

会学的考察

国友 真由美 パンティストッキングの文化社会学的考察

倉 島 哲 「自然」としての武道

小岩 誠志 スター・イメージの文化社会学

霜鳥 裕一郎 「他者」概念の社会学的考察

高井 幹人 上達の社会学

近森 高明 日本における近代スポーツの受容過程——メディアとの関わりを中心に——

浜崎 空 日本の老人福祉の成熟のために——公と私の関わりという視点から——

古川 佳奈 日本における児童虐待についての考察

右田 裕規 「モデル」と「生きがい」の関係についての社会学的考察

社会学的考察

八木 玲子 日本の道徳教育——その社会学的一考察——

薮根 章平 コミュニケーションモデルの崩壊——コミッ

ク・マーケットにおけるポスト近代空間——

吉村 真由美 現代文化におけるポケットベルの役割

佐藤 亘 「サブプリミナル効果」をめぐる社会学的考察

科学哲学科学史

伊藤 恵美子 自然物の内在的価値について

上田 彰 ポアンカレの規約概念

松原 真 組換えDNA問題とNIHガイドライン

四 京都大学大学院文学研究科（哲学系）

修士課程修了論文題目

——平成九年三月——

哲学

学

奥野 要助 時について——その自己意識からの解明——

竹中 利彦 デカルト『省察』における心身の分離と合一

町田 岳 ラッセルの多元論と時空間論

山田 健二 『数学の原理』における「変項」

中国哲学史

孫 路 易 蔽復思想における中国固有の哲学概念

インド哲学史

村川 晶子 Jaininīya-Brahmana 第二卷 Gavāmayana

哲学史

村川 晶子 Jaininīya-Brahmana 第二卷 Gavāmayana

章の研究

西洋哲学史

児玉幸子 ビーコ・デルラ・ミランドラ『愛の詩注解』
における創造論の位置付け

周藤多紀 トマス・アクィナスにおける能動知性——そ
のアウトグスティヌスの側面——

木原志乃 ヘラクレイトスにおける「火」と調和概念を
めぐって

宗教学

伊藤慶郎 シュライエルマッハーの『キリスト教信仰
論』における神と世界

林 貴 啓 時の人間学への試論——波多野精一の哲学を
主たる手がかりとして——

高橋良一 ティリッヒにおける象徴の問題

仏教学

宮野美子 ブッダの沈黙と初期仏教の実践性

朴 基 烈 デイグナーガの意知覚 (manaspratyaksa)

小寺正樹 カーラチャクラタントラ研究——第一章・世
間品を中心として——

キリスト教学

坂井 知 使徒パウロにおける律法の成就と隣人愛——
ガラテヤ五・一四を中心に——

心理学

酒井浩二 閉図形の複雑さと視覚記憶容量についての検
討

杉尾武志 図形認知における幾何学的変換情報の表現と
処理機構

社会学

大津陽子 「スタイル」の社会学

大山小夜 「債務」の社会学的研究

高山龍太郎 初期シカゴ学派の理論と調査法の検討

西村大志 「日本の近代」と「児童の身体」

野村明宏 ネイション・ステイトと未完の近代

中山ちなみ 生活構造の社会学的分析

鍋倉 聰 シンガポールのエスニシティとナショナルリテ
ィに関する比較社会学の考察

美学美術史学

後藤 結美子 ウィリアム・ブレイクの彩飾本における詩と
その挿絵との関係

平川佳世 アルブレヒト・デューラー「パニャカヴァッ
ロの聖母」に関する一考察

五 博士後期課程学修者氏名（哲学系）

——平成九年三月——

哲学……増田玲一郎、羽地亮

倫理学……板井孝一郎

インド哲学史……山下勤

西洋哲学史……浅沼光樹、沼田敦

宗教学……杉村幸代

仏教学……神田一世、黄舒眉、乙川文英、苦米地等流

美学美術史……實方葉子、西欣也、北垣千依

心理学……澤田忠幸

社会学……岡崎宏樹、川田耕

六 計 報

一、本誌『哲学研究』の編輯にかつて永年にわたって尽瘁された大阪大学名誉教授、澤瀉久敬先生には、去る平成七年二月二十六日逝去された。享年九十歳。

先生は、昭和四年京都帝国大学文学部哲学科（哲学専攻）を御卒業後、フランス留学、京都帝国大学文学部講師を経て、昭和十六年大阪帝国大学医学部に着任された。昭和二十三年には大阪大学法文学部教授に転ぜられ、昭和四十三年三月の御退官まで、文学部の哲学哲学史講座教授として御活躍され、その間、同大学文学部長をも勤められた。

先生は、フランス留学からの帰国後、昭和十三年頃から八年

間もの永きにわたって、当時の哲学講座主任の田邊元教授の懇請により『哲学研究』の編輯に文字通り専念された。ここにその御苦労と御功績を偲び、謹んで御冥福をお祈りする。

一、同じく『哲学研究』の編輯にかつて多大の御尽力をなされた龍谷大学名誉教授、三村勉先生には、去る平成七年十二月九日逝去された。享年七十九歳。

先生は、昭和十九年九月京都帝国大学文学部哲学科（哲学専攻）を御卒業された。約七年間同文学部助手を勤められたのち、昭和三十年四月に龍谷大学文学部に赴任され、昭和五十九年御退職まで同大学文学部哲学科教授として御活躍され、またその間二度にわたり同大学文学部長の任をも果たされた。

先生は、京都大学文学部の助手であった時期、当時の哲学講座主任の山内得立教授の嘱付を受けて昭和二十五年から同三十年までの約五年間、京都哲学会の事務運営に携わられ、ことに『哲学研究』編輯の責任者として多大の御苦労を担われた。ここに先生の御活躍と御功績を偲び、衷心より御冥福を念ずる次第である。